

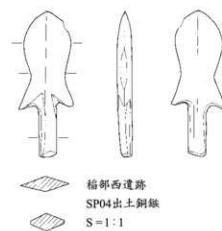
INABENISHI SITE

2015

稲部西遺跡第1次発掘調査報告書
—市道稲部本庄線道路改良工事に伴う発掘調査—

稻部西遺跡 第1次発掘調査報告書

—市道稲部本庄線道路改良工事に伴う発掘調査—



稻部西遺跡
SP04出土銅劍
S=1:1

2015

彦根市教育委員会

2015

彦根市教育委員会

稻部西遺跡 第1次発掘調査報告書

—市道稻部本庄線道路改良工事に伴う発掘調査—

2015

彦根市教育委員会



1 調査区遠景（東から）



2 調査区遠景（北から）

巻頭図版 2



調査区全景（西から）



1 SH02多角形堅穴建物（南西から）



2 SH02 (SP01) 小穴（西から）

卷頭図版 4



1 SP04小穴 銅鎌出土状態（南から）



2 SP04出土銅鎌 A面（実寸大）

3 SP04出土銅鎌 B面（実寸大）

例　　言

1. 本書は、彦根市教育委員会が、市道改良工事に伴い、平成25年9月13日から平成26年3月24日にかけて実施した、稲部西遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
整理調査については、平成26年6月10日から平成27年3月にかけて行った。
2. 本調査の調査地は、彦根市稲部町字中サクラ444番、彦富町字下尾永820番、821番、822番に位置する。
3. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の体制は下記のとおりである。

平成25年度（現地調査）

教育長：前川 恒廣	文化財部長（兼文化財課長）：西田哲雄
文化財部長：入江明生	
課長補佐：久保達彦	
史跡整備係長：北川恭子	文化財係長：木戸洋平
主査：深谷 覚	主査：池田隼人
副主査：三尾次郎	主任：森下雅子
主任：林 昭男	主任：戸塚洋輔
主任：下高大輔	技師：田中良輔
臨時職員：佃 昌幸	

平成26年度（整理調査）

教育長：前川 恒廣	文化財部長（兼文化財課長）：西山 武
文化財部長：長谷川隆司	
文化財課長：久保達彦	
課長補佐（兼文化財係長）：木戸洋平	史跡整備係長：北川恭子
主査：深谷 覚	主査：池田隼人
主査：三尾次郎	副主査：森下雅子
副主査：林 昭男	副主査：戸塚洋輔
主任：下高大輔	主任：田中良輔
臨時職員：沖田陽一	臨時職員：堀田佳典

4. 現地調査は田中が、整理調査は戸塚・田中が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：青山康男 赤田 隆 阿部修平 岩井孝之 上田定男 囲田ひとみ
金山光夫 久保農和 小林良夫 左近健一朗 佐渡 宏 高橋時子 辻 和彦
外海正司 西村 薫 西村陽子 野村憲三郎 久木正弘 平田清司 森谷義男
吉田輝一（作業員）
大西 遼（滋賀県立大学大学院生） 北森 光（滋賀県立大学大学院生）
莊林 純（滋賀県立大学学部生） 佃 昌幸（臨時職員）
整理調査：岡田ひとみ 金澤信子 高橋時子 西村陽子（作業員）
沖田陽一 堀田佳典（臨時職員）

5. 本書で使用した遺構実測図は、大西 遼、北森 光、莊林 純、佃 昌幸、田中、戸塚が作成し、遺物実測図については、北森 光、戸塚が作成した。
遺構の写真撮影は、田中と戸塚が行い、遺物の写真撮影は、戸塚が行った。

6. 現地調査及び本書の作成にあたり、以下の方々や機関からの助言・協力を得た。
林 良彦 箱崎和久 鈴木智大 森岡秀人 細川修平 北原 治 奈良文化財研究所
7. 本書の執筆は第1章2節を田中が執筆し、それ以外の執筆と編集は戸塚が行った。
8. 本書で使用した方位は、平面直角座標第IV系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。
9. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。
10. 本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。
土師器 須恵器

稻部西遺跡

目 次

巻頭図版

例言

第1章 序 論

1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	5
3 地理的・歴史的環境	6
(1) 地理的環境	6
(2) 歴史的環境	7

第2章 調査成果

1 基本層位	11
2 遺構と遺物	15
(1) 概要	15
(2) 壴穴建物	15
(3) 土坑	21
(4) 周溝付建物	21
(5) 掘立柱建物	28
(6) 小穴・包含層出土遺物	28
(7) 自然流路	28

第3章 総 括

1 稲部西遺跡における弥生時代後期後半から古墳時代前期の集落	37
(1) はじめ	37
(2) 壴穴建物について	37
(3) 周溝付建物について	38
(4) 遺構の時期と集落の変遷	40
(5) 今後の課題	40

出土遺物観察表

図版

報告書抄録

図版目次

巻頭図版

- 1 1 調査区遠景（東から）
- 2 調査区遠景（北から）
- 2 調査区全景（西から）
- 3 1 SH02多角形堅穴建物（南西から）
- 2 SH02（SP01）小穴（西から）
- 4 1 SP04小穴銅鏡出土状態（南から）
- 2 SP04出土銅鏡 A 面（実寸大）
- 3 SP04出土銅鏡 B 面（実寸大）

図 版

- 1 1 調査前風景（西から）
- 2 調査前風景（東から）
- 2 調査区遠景（東から）
- 2 調査区遠景（北から）
- 3 1 調査区全景（西から）
- 2 調査区東壁土層断面（北から）
- 4 1 SH02多角形堅穴建物（南西から）
- 2 SH02（SP01）土層断面（西から）
- 3 SH02炭化物検出状態（南から）
- 5 1 SH02（SP01）検出状態（南から）
- 2 SH02（SP01）（南から）
- 6 1 SH04堅穴建物（南から）
- 2 SH03多角形堅穴建物・SH09周溝付建物（東から）
- 7 1 SH08周溝付建物（北から）
- 2 SH07周溝付建物（北から）
- 8 1 SB01掘立柱建物（東から）
- 2 SB02掘立柱建物（北から）
- 9 1 SP04小穴銅鏡出土状態（南から）
- 2 SP04小穴（東から）
- 10 1 SR01自然流路土層断面（東から）
- 2 SR01自然流路木器出土状態（北から）

- 11 1 調査風景（東から）
- 2 調査風景（東から）
- 12 1 SP04出土銅鏡 A 面（実寸大）
- 2 SP04出土銅鏡 B 面（実寸大）
- 3 SP04出土銅鏡側面（1）
- 4 SP04出土銅鏡側面（2）
- 13 1 遺構・包含層出土土器
- 2 SR01自然流路出土土器・石器
- 14 1 SH04堅穴建物出土台石
- 2 SH04堅穴建物出土台石側面
- 3 SH04堅穴建物出土台石裏面
- 15 1 SR01自然流路出土木器 A 面
- 2 SR01自然流路出土木器 B 面
- 16 1 SR01自然流路出土木器
- 2 SR01自然流路出土木器
- 17 1 SR01自然流路出土木器
- 2 SR01自然流路出土木器
- 3 SR01自然流路出土栓
- 4 SR01自然流路出土蓋

図表目次

挿 図

第1図 稲部西遺跡の位置	2
第2図 調査区の位置	3
第3図 試掘調査トレンチ配置図	4
第4図 調査状況	5
第5図 SR01木製品出土状態	5
第6図 SR01木製品の取り上げ	5
第7図 稲部西遺跡周辺の遺跡分布	8
第8図 調査区南壁・東壁土層断面図	11
第9図 調査区全体図	13・14
第10図 SH01・05竪穴建物	16
第11図 SH02竪穴建物	17
第12図 SH03竪穴建物	18
第13図 SH06竪穴建物	19
第14図 SH04竪穴建物・SK01土坑・SK02土坑	20
第15図 周溝付建物A群	23
第16図 周溝付建物B群	24
第17図 周溝付建物SH07・09詳細図	25
第18図 周溝付建物SH08・10詳細図	26
第19図 SB01掘立柱建物・SP04小穴	27
第20図 SP04出土銅鑼	28
第21図 SB02掘立柱建物	29
第22図 道構・包含層出土遺物	30
第23図 SR01自然流路	31
第24図 SR01自然流路出土遺物（1）	32
第25図 SR01自然流路出土遺物（2）	33
第26図 弥生時代後期後半から古墳時代前期における集落の変遷	39

挿 表

第1表 出土遺物観察表	43
-------------	----

第1章 序論

1 調査に至る経緯

稲部西遺跡は、彦根市稻部町・彦富町に所在し、古墳時代から平安時代の遺物が散布する埋蔵文化財包蔵地として知られていたが、遺跡の内容は長らく不明であった。周辺部では、1981年、稲枝東小学校の南側において宅地造成工事に伴う稲部遺跡の第1次調査が行われ、古墳時代初頭前後の土器が多く出土し、当該期の集落が周辺に存在している可能性が指摘されていた。

稲部西遺跡の本調査としては、今回の調査が第1次調査となる。隣接する遺跡としては稲部遺跡、彦富南遺跡が知られているが、各遺跡との境界は明確に区分できるものではない。特に稲部遺跡と稲部西遺跡については、ほぼ同時期の遺構が両遺跡にまたがって存在しており、同一の遺跡群として把握できる可能性がある。彦富南遺跡については、本発掘調査が行われたことがなく、実態はよくわかっていない。

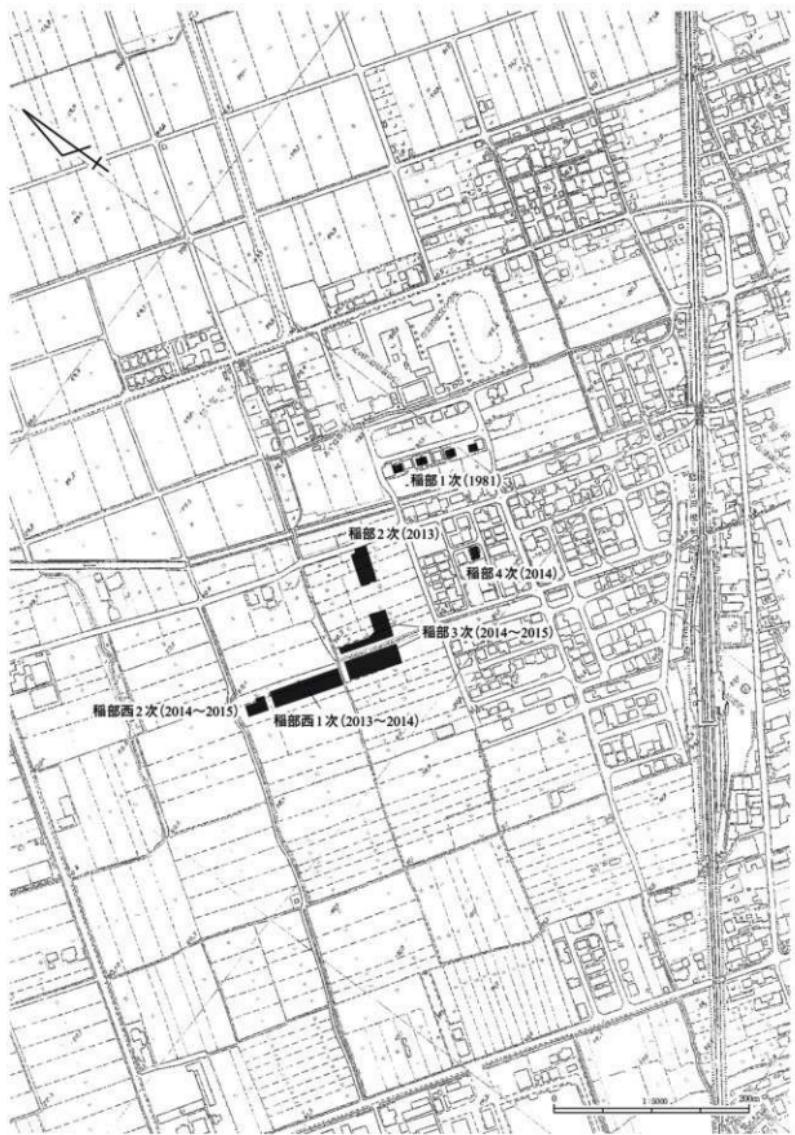
調査区は、彦根市稻部町字中サクラ444番、彦富町字下尾永820番、821番、822番に位置する。今回の調査は、稲枝駅周辺地域の整備事業に関連する市道稻部本庄線道路改良工事に伴うもので、工事に先立ち提出された文化財保護法第94条の通知及び依頼にもとづく本発掘調査である。なお、稲部本庄線と交差する南北方向の道路である芹橋彦富線の道路改良工事予定地については、稲部遺跡の範囲に該当し、平成25年度から本発掘調査を実施している。

道路計画範囲は、古墳時代から平安時代の埋蔵文化財包蔵地である稲部西遺跡の範囲内に位置し、遺構の存在が予想されたため、計画地のうち用地買収の終了している範囲を対象として、平成25年2月5～7日、遺構の有無を確認するために試掘トレンチ17箇所を設定して試掘調査を行った。その結果、トレンチ6箇所で遺構が確認され、開発に先立ち発掘調査を実施する必要性が指摘された。

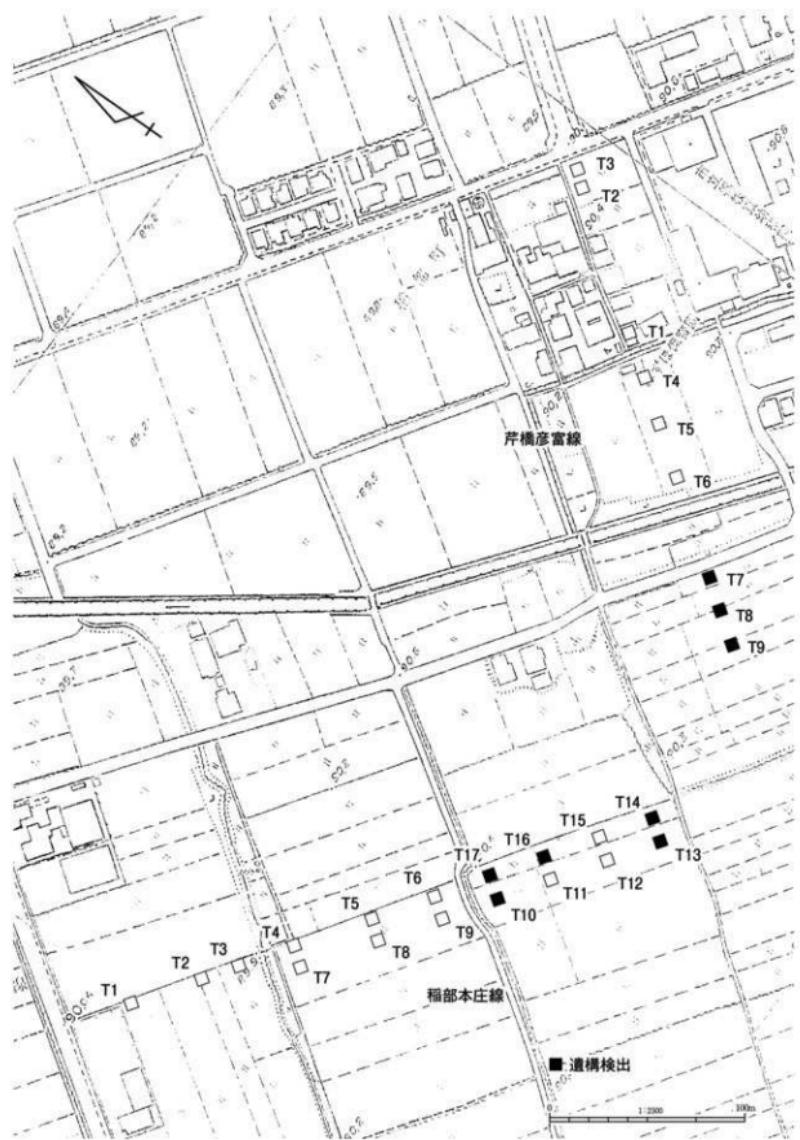
この試掘調査結果をもとに協議を経て、遺構と遺物が確認され、平成25年度において調査の実施が可能な道路予定地2,089.54m²を対象として、平成25年9月13日から本発掘調査を開始した。しかし、12月後半以降には、現地の基盤層が軟弱なために、掘削地点への重機の進入が困難な状況となり、また重機による掘削を行う期間が、基盤層の乾燥・硬化が進まない冬季であったため、予定調査区の西端部600m²の範囲については、1月31日に変更契約を結び、平成26年度以降に調査を実施することとした。よって、平成25年度については、1,489.54m²を対象として本発掘調査を行った。調査期間は、平成25年9月13日～平成26年3月24日である。その後、平成26年6月10日～平成27年3月にかけて整理調査を行い、本報告書の刊行となった。



第1図 稲部西遺跡の位置



第2図 調査区の位置



第3図 試掘調査トレンチ配置図

2 調査の方法と経過

調査区の設定 発掘調査を実施した範囲は、道路予定地に合わせた細長い調査区である。このため、調査にあたっては、道路予定地に平行した任意方向の5m間隔グリッドを設定した。報告にあたっては、任意方向のグリッドを国家座標に合わせ直し、周辺調査地点との整合をはかった。

表土掘削 調査区全域の近現代及び近世の水田の耕作土は、重機（バックホー）を用いて除去し、遺構検出が可能な基盤層まで掘り下げた。ただし、基盤層上面から深さ約10cmまでの範囲では、鉄分の沈着が著しく、遺構の検出が困難であるため、これよりも鉄分の沈着が希薄になる基盤面下約5～10cmの深さまで掘削を行った。

遺構精査 遺構検出面である基盤層は、グライ化した粗粒砂を含む灰色粘質土で、粘性がきわめて強いものである。一方、遺構の埋土は暗灰色の粘質土で、基盤層よりもわずかに暗い程度の色調の差である。このため、遺構検出作業は困難であった。遺構埋土の掘削においても、粘性のきわめて強い埋土であり、掘削中に水が湧き出していくことから、掘削に手間取り、予想以上の時間がかかった。遺構内の調査に当たっては、セクションベルトを設定して埋土の把握に努めた。埋土が特徴的な遺構については土層断面図を作成した。

記録の作成 遺構の平面図と土層断面図は適宜水糸を張り、縮尺20分の1で人力により作成した。遺物の出土状態図は、縮尺10分の1とした。

調査の経過 遺構は堅穴建物、周溝付建物、掘立柱建物、土坑、小穴、自然流路、中近世の耕作溝で構成され、各遺構は同一面で



第4図 調査状況



第5図 SR01本製品出土状態



第6図 SR01本製品の取り上げ

認識できる。

12月から本格的な重機による表土の掘削と遺構検出作業を開始したところ、1月には堅穴建物及び小穴群を検出した。しかし、周溝付建物については当初は認識しておらず、調査の終盤で周溝が周間にめぐる建物の存在を認識するに至った。調査終了間際の3月18日には、小穴SP04から銅鏡が出土した。

整理調査 報告書作成作業は彦根市民会館において、現地調査終了後の暫定整理を経て、平成26年6月10日から平成27年3月まで行った。

3 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

稲部西遺跡は、北の宇曾川、文禄川と南の愛知川の間に位置するが、北端は文禄川に隣接する位置関係にある。愛知川の河道は、16世紀に洪水によって現在の河道へと変化したと推定されており、それ以前の愛知川の河道の状況と地理的関係をふまえておく必要がある。かつての愛知川は、稲部町、彦富町から湖岸の薩摩町、柳川町へと流れていたが、その旧愛知川の河道が文禄川と来迎川である。来迎川は稲部遺跡2次調査区から南へ約600mの位置を流れ、彦富町から柳川町へと至る。文禄川は稲部遺跡2次調査区の北側を流れ、稲部町から薩摩町へ至る。このように、稲部西遺跡は、旧愛知川の河道に挟まれた微高地上に立地している。

愛知川は、中流付近までは河岸段丘を形成し、その下流は天井川となっている。現在の下流部河道は、JR東海道本線愛知川鉄橋の付近から西に曲がり、新海浜の河口まで達している。現在の河道は、16世紀の洪水によって河道が変化するまでは支流であり、かつては愛知川中宿から北行する本流が、甲崎町まで蛇行しながら琵琶湖に注いでいたと考えられる。湖岸には浜堤が発達し、その背後にある標高86m以下の低地部には後背湿地や内湖が広がっていた。愛知川河口部付近から石寺町付近までは入江や水路があり、低湿な景観が展開していた。現在でも、柳川町に残る湾入部や荒神山山麓の曾根沼がその名残をとどめている。

また、愛知川は氾濫による洪水を頻発しており、過去の記録によると、文化6年(1806)には、田附町の「湯の花井」の堤防が決壊し、国領村の集落50戸のうち40戸が流出するという災害のあったことが知られる。こうした環境のなかで、人々は洪水によって形成された自然堤防上に村落を営み、洪水の被害に耐えながら耕地の経営を行っていたのであろう。現在分布する集落の多くが、愛知川の堤防沿い、あるいは旧河道に残る自然堤防上に立地することからも、このことをよく示している。明治初期に作成された地籍図によると、現在の集落の位置とほとんど変わらず、少なくとも近世の集落と現在の集落の位置は、ほぼ一致しているといえる。また中世の集落についても、中世から近世につながる集落が多いという発掘調査の成果を考慮すると、ほぼ重複している可能性がある。さらに、現在確認できる遺跡の分

布状況をみると、自然堤防上に連なっていることに注目できる。すなわち、出路町から甲崎町をへて薩摩町に至る文禄川流域、彦富町西側から普光寺町をへて薩摩町西側に及ぶ来迎川流域、そして本庄村から南三ツ谷町を結ぶ範囲の三つの地域は、愛知川によって形成された自然堤防であるとみられ、縄文・弥生時代以降の遺跡が分布しているのである。

（2）歴史的環境

縄文時代 縄文時代の遺跡では、屋中寺廃寺遺跡で縄文時代早期後半の押型文土器、中期の船元式や北白川C式土器が包含層から出土している。愛荘町なまず遺跡では、晚期後葉の土器棺が検出され、愛荘町長野遺跡においても同時期の土器が出土している。肥田町肥田城跡では、晚期の刻目凸帶文土器が出土している。

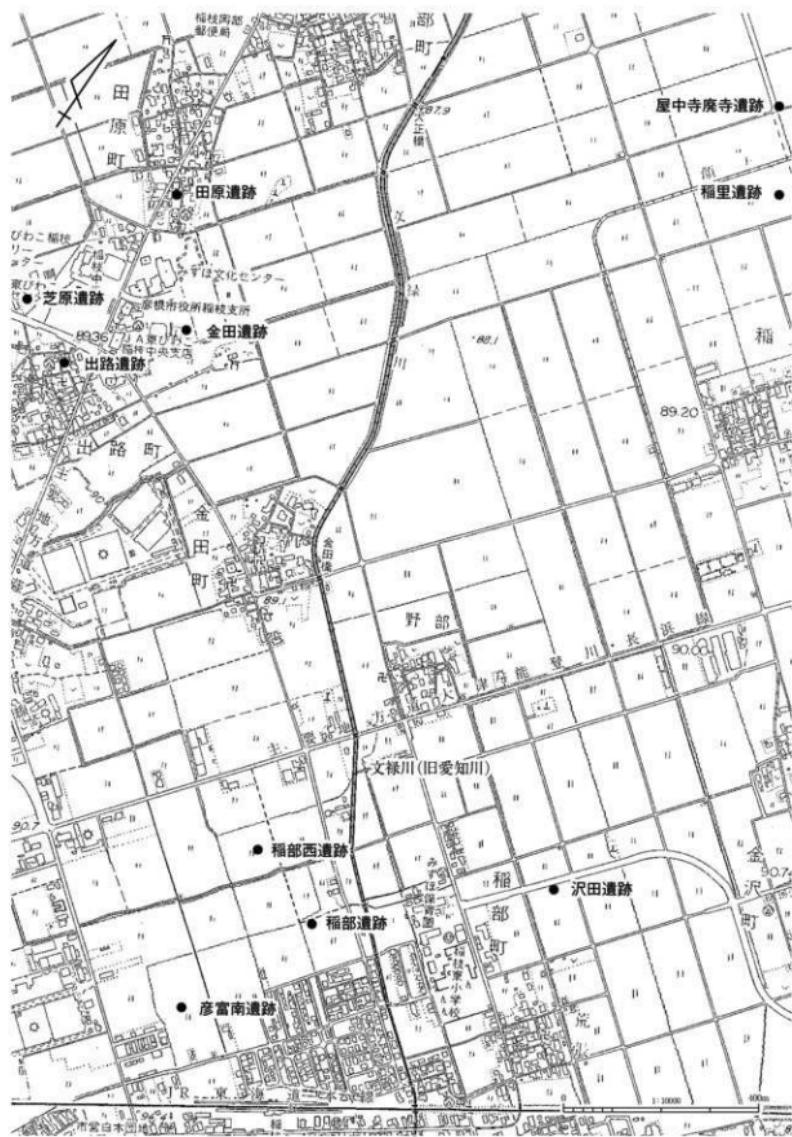
弥生時代 弥生時代になると、前期の遺跡では稲里町稲里遺跡で炭化米、アワ、キビが出士し、水稻農耕が開始されている。

宇曾川左岸の微高地上に立地する肥田西遺跡では、1983年に行われた発掘調査において弥生時代中期後半の方形周溝墓の周溝とみられる溝が検出され、一部の溝からⅣ様式期の土器が出土している。湖東地域における当該期の遺構と遺物としては、数少ない重要なものである。また、長野遺跡、なまず遺跡、屋中寺廃寺遺跡、荒神山東麓に位置する妙楽寺遺跡と川瀬馬場遺跡で遺構と遺物が確認されている。弥生時代後期では、妙楽寺遺跡で集落が継続し、堅穴建物が検出されている。

弥生・古墳移行期 弥生時代終末期から古墳時代前期にかけては、稲部遺跡、長野遺跡で古墳時代初頭の土器が出土している。稲部遺跡では、1981年2月2日～3月19日にかけて宅地造成に伴って1次調査が行われ、遺構の状況は不明であるが、包含層から庄内式から布留式古段階を中心とする土器が多数出土した。受口状口縁甕、壺、高坏、器台、手あぶり形土器、小型丸底壺といった豊富な器種がみられ、注目される。より湖岸に位置する普光寺町の普光寺廃寺遺跡でも近い時期の集落が確認され、庄内式期を中心とした古式土師器が出土している。

古墳時代 古墳時代前期には、本庄村の芝原遺跡で主に堅穴建物からなる集落が確認され、4世紀後半の堅穴建物からは、櫛の羽口片と鉄滓が出土し、4世紀代の数少ない鍛冶工房の例として注目できる。古墳時代中期の様相は不明瞭であるが、古墳時代後期の集落として芝原遺跡と出路遺跡が知られる。なまず遺跡では6世紀末の大壁造建物が検出され、渡来系氏族との関係が推測される。

古墳では、荒神山山頂部に全長124mを測る古墳時代前期末の前方後円墳である荒神山古墳が築かれる。これに続く明確な中期古墳は確認されていないが、荒神山南裾に馬蹄形の地割痕跡がみられ、「塚村」の地名ともあわせて前方後円墳の存在する可能性が指摘されている。仮に古墳であるとすると、墳丘長105m、周濠を含めると158mの大型古墳となる。後期には、荒神山に群集墳が営まれ、中には正方形プラン穹窿頂持ち送り石室をもつ古墳も築かれ、やはり渡来系氏族との関係がうかがわれる。その他、普光寺町のゲホウ山古墳、肥田町



第7図 稲部西遺跡周辺の遺跡分布

の塚乞手古墳で埴輪をもつ後期古墳が確認されている。

古代 古代になると、市域南部の湖岸近くに普光寺廃寺、屋中寺廃寺、下岡部廃寺、八坂廃寺の白鳳寺院が建立される。奈良時代には、荒神山北麓の東大寺領観流莊の存在が知られる。正倉院に残る墨田絵図によると、愛知・犬上両郡にまたがる70町が東大寺に施入され、観流莊が成立したという。また、延久2年（1070）の『近江国弘福寺領庄田注進状』により愛知郡2条7里・8里・3条16里に弘福寺領平流莊が存在したことが記されており、和銅2年（709）の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田宅拾毫町毫段參拾陸歩」とみえることから、弘福寺領平流莊は8世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。

この時代の遺跡としては、普光寺廃寺遺跡、芝原遺跡、肥田城跡、國領遺跡、長野遺跡、なます遺跡、杏掛遺跡が確認されている。長野遺跡、なます遺跡、杏掛遺跡付近には、古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されている。長野遺跡では奈良時代後期の「上殿」、「寺」の墨書き土器や転用硯、なます遺跡では「郡」の墨書き土器、杏掛遺跡では「愛女」の墨書き土器や転用硯などが出土している。長野集落にある大瀧神社はもと「大領宮」と号していたことも注目される。平安時代になっても國領遺跡では続いて集落が営まれるが、再び普光寺廃寺遺跡、芝原遺跡、肥田城跡でも集落が確認されている。なかでも芝原遺跡では9世紀の京都産綠釉陶器皿、畿内産黒色土器碗、灰釉陶器皿の転用硯がまとまって出土し、一般集落とは異なる様相である。

中世 中世では、平安後期から鎌倉時代にかけての集落が國領遺跡、普光寺廃寺遺跡、市遺跡で営まれる。國領遺跡では15世紀以降の柿経が出土している。宇曾川下流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15世紀末から16世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、琵琶湖と宇曾川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空間であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曾川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置する。道路や土壙で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと捉えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋敷遺跡では道路や土壙で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

室町時代後期には、肥田城跡をはじめとした城館が築かれる。肥田城は、高野瀬氏が築城し、織豊期では蜂屋氏、長谷川氏の居城となった。肥田城の中核部としては、小字「上新田」、「下新田」であったと推定されている。また、その北西側と南西側には「勘ヶ由屋敷」、「孫右衛門」、「藤藏屋敷」、「丹波屋敷」、「休ヶ屋敷」、「新助屋敷」、「民部屋敷」、などの小字があり、家臣団屋敷がひろがっていたと考えられている。

近世 稲部西遺跡周辺は、明治7年（1874）に稲部村と改称されるまでは、野部村という村名であった。明治時代初頭の地籍図によると、江戸時代には大部分を水田が占める村で

あったことが知られる。

参考文献

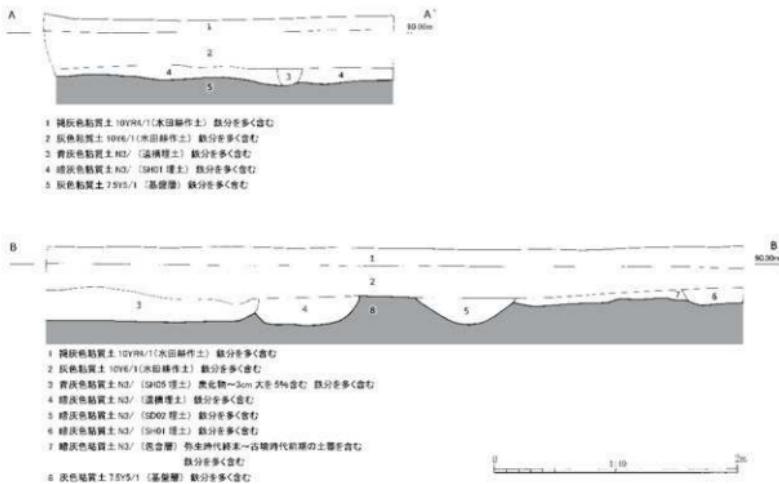
- 愛知川町教育委員会 1985『香掛遺跡・市遺跡Ⅲ発掘調査概要』
- 愛知川町教育委員会 2002『なます遺跡』
- 愛知川町 2005『近江愛知川の歴史 第1巻』
- 北原 治 2002「弘福寺受領愛智郡平流莊について」『紀要』第15号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1986『妙楽寺遺跡Ⅰ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1986『妙楽寺遺跡Ⅱ』
- 彦根市教育委員会 1987『古屋敷遺跡発掘調査概要報告書』
- 彦根市教育委員会 1988『馬場遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1988『肥田城遺跡発掘調査報告書』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1989『妙楽寺遺跡Ⅲ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1995『普光寺廃寺・屋中寺廃寺』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1997『芝原遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1998『屋中寺廃寺遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1998『普光寺廃寺遺跡発掘調査報告書』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1999『神ノ木遺跡・堀南遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1999『長野遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2001『長野遺跡Ⅱ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2001『稻里遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2003『市遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2006『八坂東遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2006『国領遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2008『長野遺跡Ⅲ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2008『肥田城Ⅰ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2010『肥田城遺跡・肥田西遺跡・鶴田遺跡』
- 彦根市 2007『新修彦根市史 第1巻』
- 彦根市教育委員会 1982『縄部遺跡発掘調査概要報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第3集
- 彦根市教育委員会 2008『荒神山古墳Ⅲ・Ⅳ』彦根市文化財調査報告書第2集
- 彦根市教育委員会 2011『川瀬馬場遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告第47集
- 彦根市史編纂委員会 2001『彦根 明治の古地図Ⅰ』

第2章 調査成果

1 基本層位

稻部西遺跡における基本層位としては、地表面から順に1～4層に分類できる。1層は、褐灰色粘質土で、近現代の水田耕作土である。2層は、灰色粘質土で、近世の水田耕作土である。3層は、暗灰色粘質土で、古式土器を含み、弥生時代終末期から古墳時代前期と推定される遺物包含層である。4層は灰色粘質土の基盤層で、粗粒砂を含み、粘性は強いが、軟弱である。基盤面の標高は、89.50～89.70mで、西端部の自然流路SR01に向かって低くなっている。基盤面まで掘り下げるとき、湧水が顕著となり、地下水位は高い。4層の15～20cm下では、基盤層が粘質土から青灰色砂質土に変化している。3層と4層は、鉄分を多く含み、特に4層の基盤層上面には鉄分が顕著に沈着しており、遺構検出を困難にしている。そのため、鉄分の沈着が薄くなる基盤面から約5cm～10cm下まで掘削を行い、遺構検出を行った。

遺構検出は、水田面下40cm程度の基盤層である4層上面で行った。検出面の標高は、89.50m～89.70mで、西端部が低く、逆に東側が高くなっている。検出された遺構の大半は、弥生時代終末期から古墳時代前期のものである。埋土は暗灰色粘質土で、しまり、粘性とともに

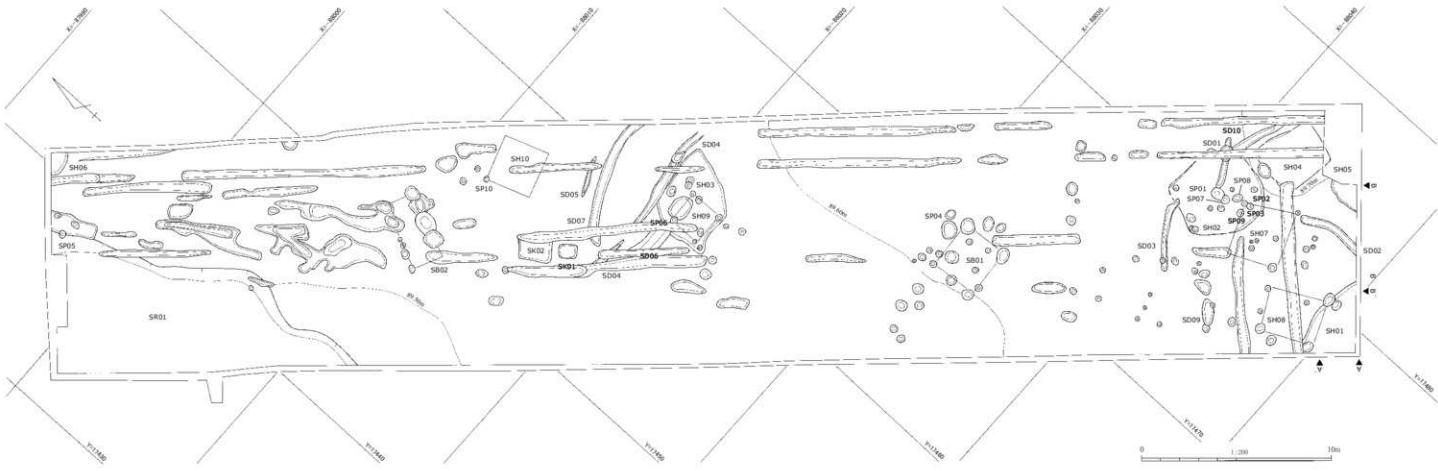


第8図 調査区南壁・東壁土層断面図

強い土質で、基盤層よりもわずかに色調が暗く、しまりが強いのが特徴である。そのため、鉄分の沈着とあいまって、遺構検出はやや難しい。

最も時期の古い遺物としては、SH01に混入した可能性の高い縄文時代晩期の土器がわずかに出土している。遺構検出面では古式土師器の他に、奈良・平安時代の須恵器が出土し、周辺では中世から近世の陶磁器もわずかに表採されているが、遺物の出土はわずかである。また、調査区全体にわたって、溝が多数検出されている。埋土は青灰色粘質土で、砂質土を多く含み、しまり・粘性ともに弱いものである。東西方向に規則的に並び、一部を除いていずれも深さ10cm前後である。これらの溝からは、遺物がほとんど出土していない。これらの溝は、出土遺物から時期を特定できないが、稲部遺跡で検出された耕作溝と考えられる東西方向の溝跡と特徴が似ており、近世の耕作に関わる溝であると推定される。当該地は、明治初期に作成された地籍図によると、水田地帯となっていることからも、これらの溝は江戸時代の耕作溝である可能性が高いと考えられる。ただし、耕作が開始された時期については不明である。なお、これらの耕作溝については、弥生時代終末期から古墳時代前期の溝と区別するために、調査区全体図では遺構番号を付与していないことをことわっておく。

このように、今回の調査で検出された遺構と遺物の大半は、弥生時代終末期から古墳時代前期のものである。全体的に遺構は耕作による削平を受け、縄文時代晩期や奈良・平安時代の遺物も散見された。



第9図 調査区全体図

2 遺構と遺物

(1) 概 要

検出された遺構は、弥生時代終末期から古墳時代前期のものが大半で、当該期の遺構として、竪穴建物6棟、土坑5基以上、周溝付建物5棟、掘立柱建物2棟、自然流路1条が検出された。この他に、SH01に混入した可能性の高い縄文時代晚期の土器がわずかに出土し、遺構検出面では古式土師器、奈良・平安時代の須恵器が出土している。また、調査区全体にわたって、近世の耕作溝が検出されている。

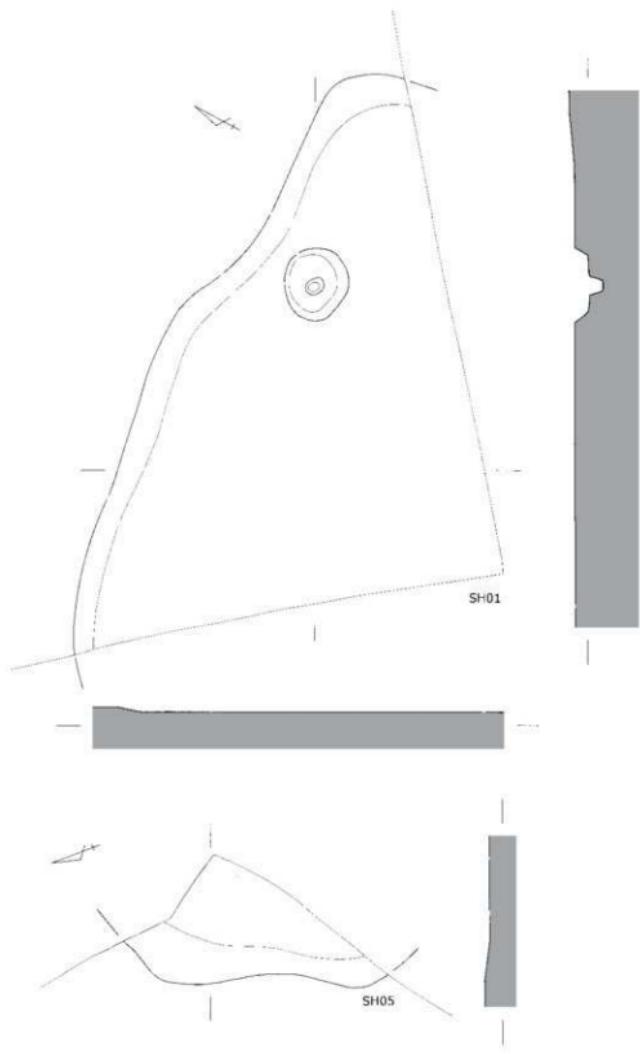
(2) 竪穴建物

SH01（第10図） 調査区東端で検出された竪穴建物である。大部分が調査区外に広がるが、平面形は方形ではなく、多角形である可能性が高い。柱穴が一つ確認できる。規模としては、径10m以上になる可能性がある。埋土からは縄文時代晚期の刻目凸帯文土器（2）が出土した。貼り付けによる凸帯があり、外面調整は、凸帯の上部は横ミガキにより平滑な面をなし、凸帯以下は横ナデ調整で、粘土紐の継ぎ目痕を残す。内面には指ナデと指押さえの痕がのこる。これは、遺構の時期を示す遺物ではなく、周辺から混入した可能性を考えられる。この他に遺物は出土していない。

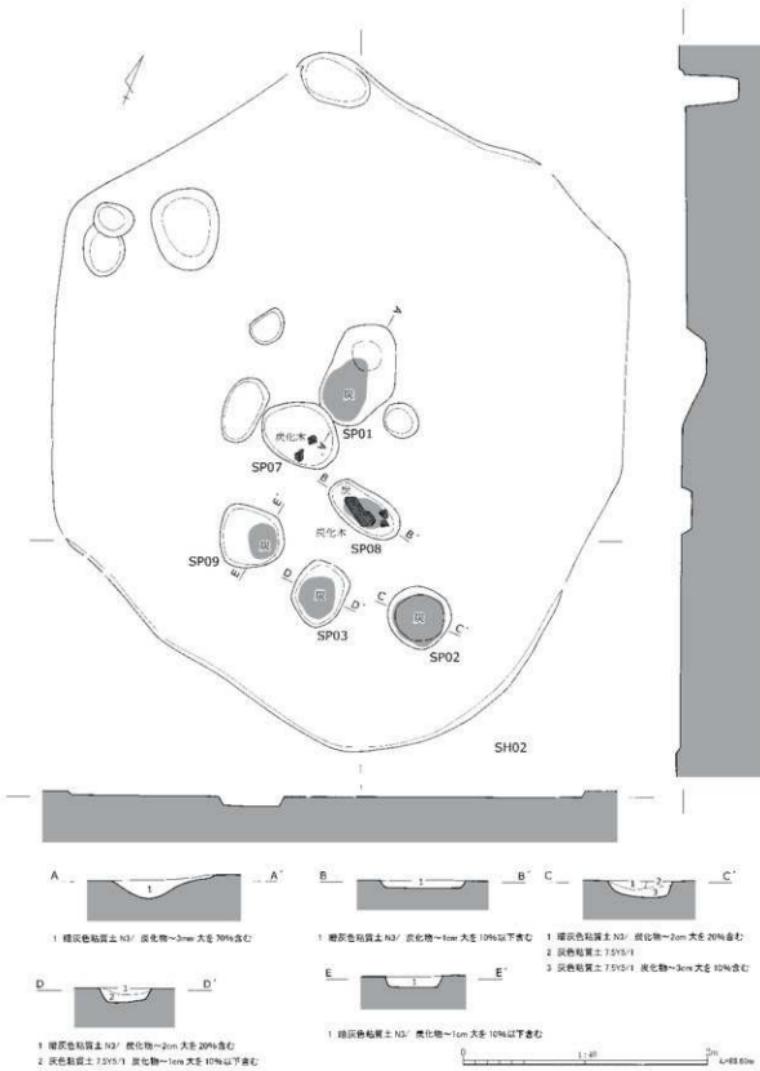
SH05（第10図） 調査区北東部で検出された竪穴建物である。一部が検出され、大半は調査区外へ展開している。平面形は、方形や円形ではなく、多角形であると推定できる。大きさは不明だが、径5m前後と推定される。遺物は出土していない。

SH02（第11図） 調査区東側で検出された竪穴建物である。平面形は不整形であるが、削平によって一部消失している可能性が高い。角になる部分が4カ所認められるため、東側と西側が削平されていると考え、全形を復元すると平面六角形の竪穴建物であったと推定できる。長軸5.7m、短軸4.7mの規模と推定できる。小穴 SP01・SP07・SP08・SP09・SP03・SP02の埋土には炭化物が含まれる。SP07とSP08には長さ6cm以上の炭化木片が含まれていた。炭化物は、薄いチップ状を呈する。通常の炉穴にしては、数が多くなるため、何らかの生産活動に伴う工房的な建物である可能性がある。上面からは受口状口縁甕口縁部片（7）が出土した。口縁端部上面はややくぼみ、口縁部外面には2条の沈線をもつ。外面全体には煤が付着する。庄内式期新段階のものとみられる。遺構の時期を考えるうえで参考となる資料であるが、削平が著しく、掘方がわずかしか残っていないため、周辺から混ざりこんだ可能性も否定できない。あるいは、後述する周溝付建物 SH07や SD01に本来伴っていた可能性も十分に考えられる。

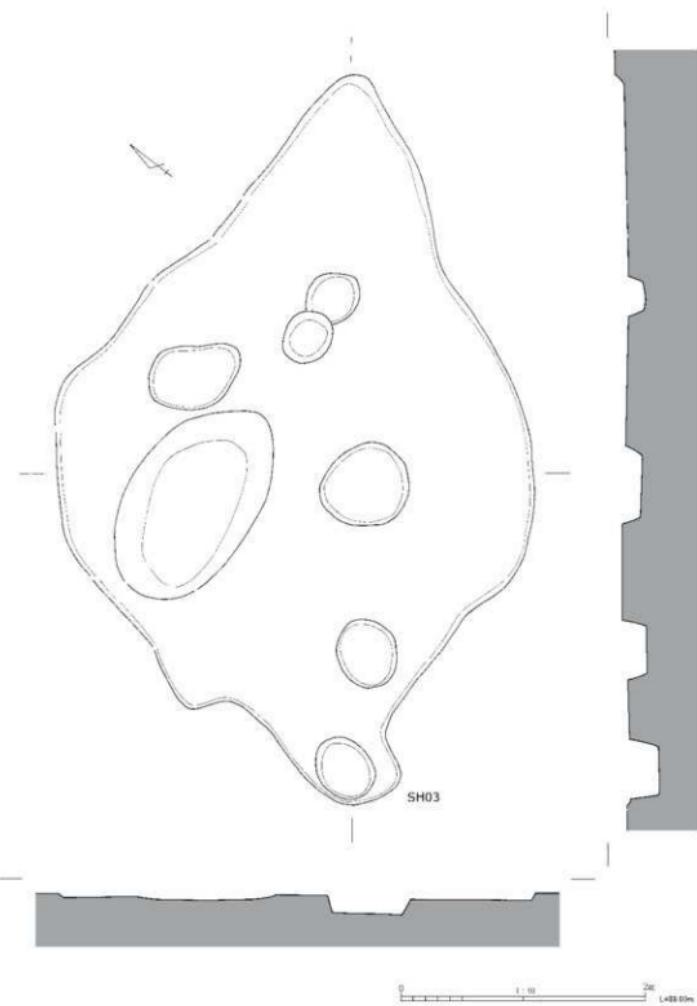
SH03（第12図） 調査区中央部で検出された平面が六角形の竪穴建物である。長軸6.0m、短軸3.9mを測る。建物内には、柱穴とみられる小穴があり、西側の隅には土坑1基が伴う。埋土からは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃の土器の小片が出土したが、図化が不可



第10図 SH01・05竪穴建物



第11図 SH02堅穴建物



第12図 SH03堅穴建物

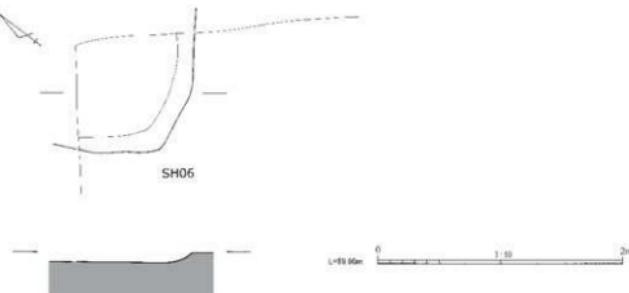
能である。

SH06（第13図） 調査区西端部で検出された遺構で、堅穴建物と推定される。一部が検出され、大半は調査区外へ広がっている。平面形ははっきりしないが、方形ないし多角形と推定される。遺物は出土していない。

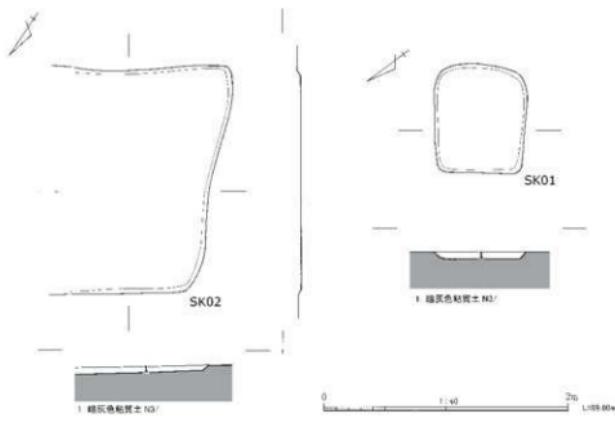
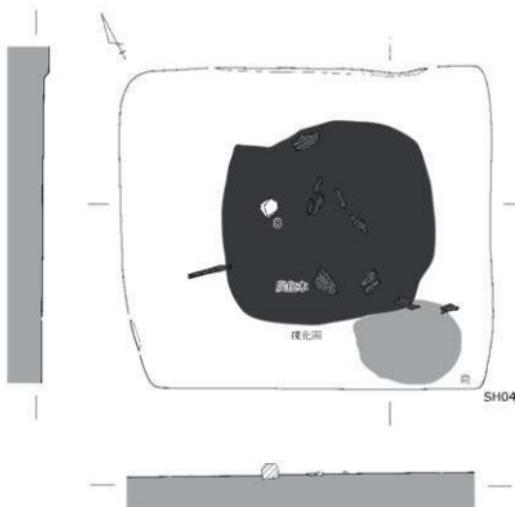
SH04（第14図） 調査区北東部で検出された堅穴建物である。平面は不整形であるが、おそらく掘方の上端付近が削平により消失しているものと考えられる。南東部の炭の集中範囲が、検出された掘方よりも外側に広がることも、こうした可能性が高いことを示している。周辺の遺構との関係から、全体を復元すると、長軸3.0m、短軸2.6mの平面方形の堅穴建物であると推定される。削平を受けていることなどから、現地では柱穴を検出できなかった。

建物内の中央床面では、径1.6~1.7mの範囲で硬化した面が認められる。硬化面に対応するように、炭化物が散在し、硬化面の西よりでは床面に台石（8）が据えられていた。台石（8）は、長さ13.2cm、幅20.5cm、厚さ13.1cmである。使用面は、上面、下面、右側面の一部、左側面の一部である。断面形は現状で六角形であり、あるいはもともと台形であった可能性もある。石材は凝灰岩で、暗青灰色を呈する。上下の使用面は、光沢をもってきわめて平滑な面となり、部分的に鉄分が付着している。特に、出土時に上になっていた面では鉄分の付着が顕著である。鉄分の付着が上面のみに著しい点や付着範囲の広さは、土中の鉄分の付着だけでは説明しきれないものである。また、上下の使用面を観察すると、いくつかの単位が認められ、径2~7mmの痘痕状の敲打痕が残っている。一方、両側面の使用面では、敲打痕は顕著ではないが、赤変して被熱が認められる。以上のような使用面の様子から、台石（8）にみられる使用痕は、鉄器製作における鍛打作業に伴うものである可能性を考えられ、鉄床石である可能性も十分に考えられるものである。ただし、埋土からは、鉄滓や鉄器は出土せず、遺構の時期を明確に示す土器も出土していない。

居住用にしては小規模な堅穴建物であり、床面の一部が硬化し、特徴的な台石を伴うことから、SH04は特殊な生産活動に用いられた工房跡とみられ、鍛冶工房である可能性も考え



第13図 SH06堅穴建物



第14図 SH04堅穴建物・SK01土坑・SK02土坑

られる。

(3) 土 坑

SK02 (第14図) 調査区中央で検出された土坑で、平面形は方形と推定される。遺物は出土していない。

SK01 (第14図) SH02の東側で検出された土坑で、長軸0.9m、短軸0.74mを測る。遺物は出土していない。

(4) 周溝付建物

周溝付建物は、竪穴建物や平地式建物の周囲を溝で区画した遺構で、SH07・SD03・SD10、SH08・SD02・SD09、SD01、SH09・SD05・SD07、SH10・SD04・SD06の5棟を検出した。このうちの1棟については、周溝SD01のみが検出され、削平などにより建物部分は検出されなかったが、柱穴が存在していたものと想定したものである。

周溝付建物は、大きく2カ所に配置が分かれており、調査区東端部をA群、調査区中央部をB群として報告する。

周溝付建物 A群 (第15図) SD01、SH07・SD03・SD10、SH08・SD02・SD09の3棟が集中し、周溝付建物は、竪穴建物SH01、SH02、SH04、SH05の上から掘りこまれている。よって、周溝付建物が竪穴建物よりも時期が新しいのは明らかである。また、SD01、SH07、SH08の3棟は相互にきりあっているが、前後関係は不明で、相互に近い時期の遺構であることは推測できる。周溝の方向と建物の軸をみても、規則性は認められるからである。なお、SH07とSH08では、建物の規模、周溝で区画された範囲ともに近い大きさである。

SD01 (第15図) SD01は、A群のなかでも北端で検出された周溝である。建物の柱穴は削平などにより検出されなかったが、SD01の北西部には掘立柱建物あるいは平地式建物がもともと存在していた可能性が高い。SH07の周溝SD10ときりあうが、両者の前後関係は不明である。幅14.0~36.0cm、深さ8.0~20.0cmを測る。削平によって部分的に消失している可能性が高い。

SD01からは遺物は出土していない。

SH07・SD03・SD10 (第15・17図) SH07の柱穴の検出は、3カ所を確認するに留まった。周溝で区画された範囲は円形と推定され、周溝内側の立ち上がりから測ると、推定で径約10.0mである。建物の柱穴は、径24.0cm~48.0cmの円形で、深いもので60.0cmを測る。柱穴の埋土は、暗灰色粘質土である。掘立柱建物あるいは平地式建物が想定されるものである。建物の規模は、長軸3.2m、短軸3.0m、面積9.6m²である。

周溝は、北側をめぐるSD10と西側をめぐるSD03である。SD10は直線的で、幅36.0cm~44.0cm、深さ6.0~12.0cmを測る。東端部は耕作溝に切られており、西端部はSD01と切りあうが、前後関係は不明である。SD03は、幅28.0~44.0cm、深さ5.0~7.0cmである。周溝は全周しないが、部分的に削平によって消失している可能性が高い。周溝の埋土は、暗灰色粘質土である。

柱穴と周溝からは遺物は出土していない。

SH08・SD02・SD09（第15・18図） SH08の中心建物の柱穴は4カ所確認された。周溝で区画された範囲は円形と推定され、周溝内側の立ち上がりから測って推定で径約11.0mである。建物の柱穴は、径36cm～76cmの円形で、深いもので44.0cmを測る。柱穴の埋土は、暗灰色粘質土である。掘立柱建物あるいは平地式建物が想定され、建物の規模は、長軸3.12m、短軸2.52m、平面積7.86m²である。

周溝は、北東側をめぐるSD02と西側をめぐるSD09である。SD02は東端部で南側へ曲がる。幅40.0cm～48.0cm、深さ5.0～7.0cmを測る。SD09は、残存状態が良好ではなく、一部の検出に留まった。最大幅64.0cm、深さ7.0～8.0cmを測る。周溝は全周しないが、部分的に削平によって消失している可能性が高い。周溝の埋土は、暗灰色粘質土である。

柱穴と周溝からは遺物は出土していない。

周溝付建物B群（第16図） SH09とSH10の2棟が切り合うが、両者の前後関係は不明である。SH09は、多角形竪穴建物SH03を切っており、周溝付建物が竪穴建物よりも時期が新しいのは明らかである。

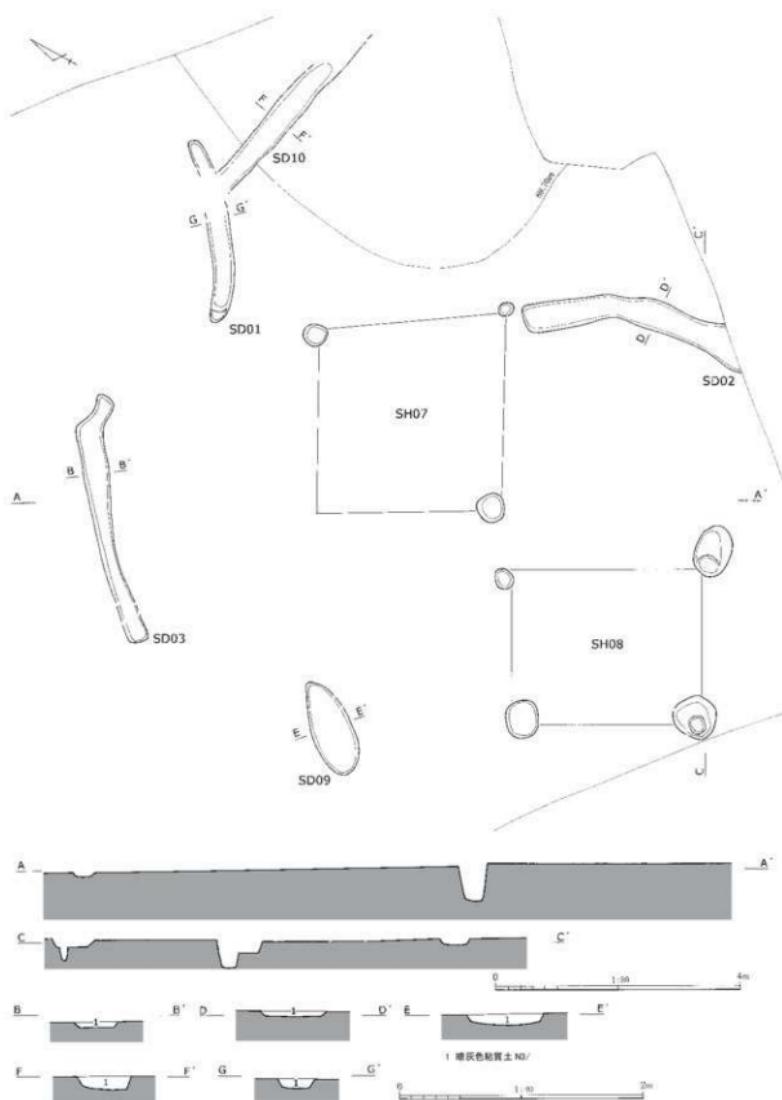
SH09・SD05・SD07（第16・17図） SH09の中心建物の柱穴の検出は、4カ所確認された。周溝で区画された範囲は円形あるいは隅丸方形と推定され、周溝内側の立ち上がりから測ると、推定で径約11.0mである。建物の柱穴は、径24.0cm～64.0cmの円形で、深いもので32.0cmを測る。柱穴の埋土は、暗灰色粘質土である。掘立柱建物あるいは平地式建物が想定されるものである。建物の規模は、長軸2.08m、短軸1.84m、平面積3.83m²を測る。

周溝は、北側をめぐるSD05とSD07である。SD05は、SD07の北側をめぐる細い溝で、溝の方向と位置関係から、SD07と関連する溝であると考えた。SD07は、幅36cm～60cmで、深さ12～14cmである。SD05は、幅16.0～24.0cm、深さ7.0～8.0cmを測り、きわめて細い溝である。周溝は全周しないが、部分的に削平により消失している可能性が高い。周溝の埋土は、暗灰色粘質土である。

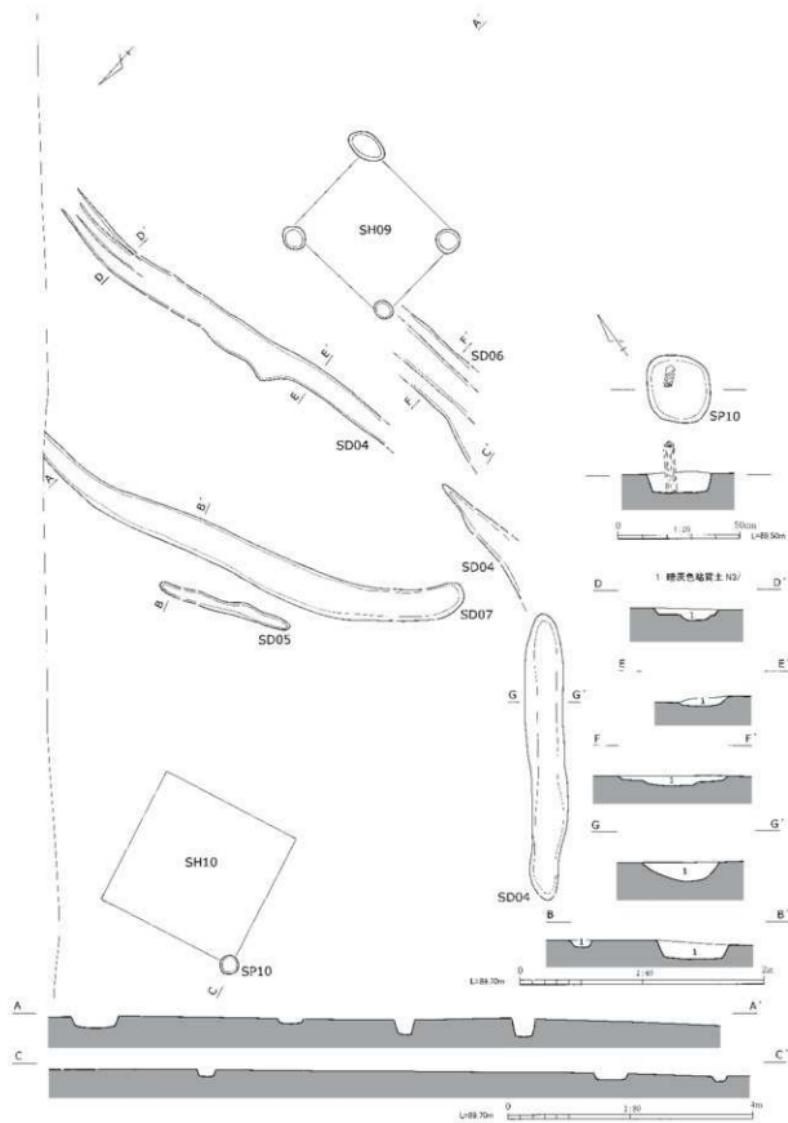
柱穴と周溝からは遺物は出土していない。

SH10・SD04・SD06（第16・18図） SH10の中心建物の柱穴の検出は、1カ所に留まったが、柱穴SP10では長さ12.0cm、径5.0cmの柱根が残っていた。ただし、柱根の残存状態が良好ではなく、取り上げることができなかった。周溝とみられるSD04・SD06とSP10から、全体を推定した。周溝で区画された範囲は円形と推定され、周溝内側の立ち上がりを基準として推定すると径約30.0mである。建物の柱穴は長径27.0cm、短径26.0cmの円形で、深さ8.0cmを測る。柱穴の埋土は、暗灰色粘質土である。掘立柱建物あるいは平地式建物が想定されるものである。全体を推定すると、1間×1間の構造で、建物の規模は2.4m×2.4mである。平面積は5.7m²程度であると推定される。建物の軸については、あくまでも、隣り合うSH09と周溝を参考にして復元したものである。

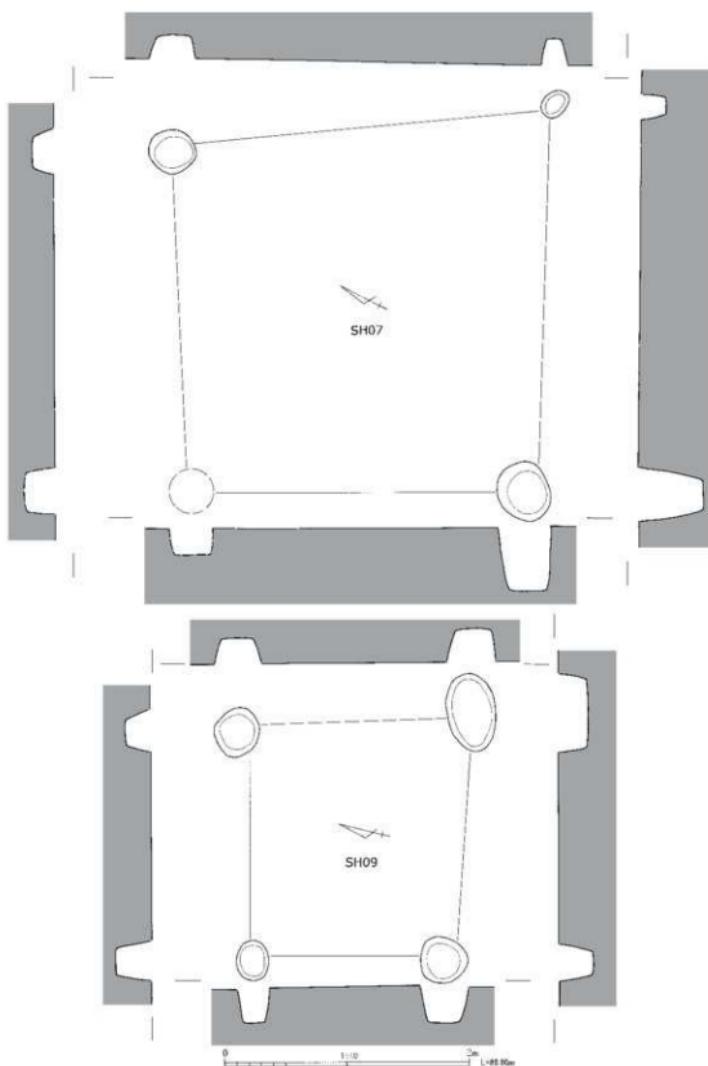
周溝は、南側をめぐるSD04とSD06である。SD04は途切れで検出されたが、一連の溝と考えた。幅16.0cm～64.0cm、深さ6.0～14.0cmである。SD04の北端部では、内側が部分



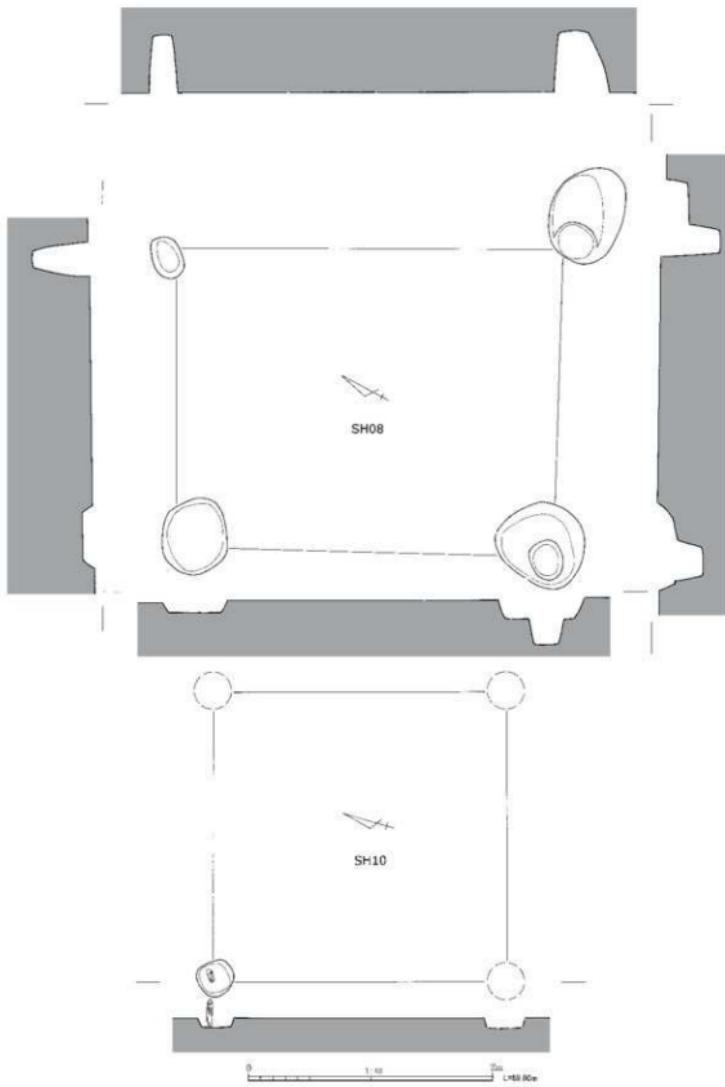
第15図 周溝付建物 A群



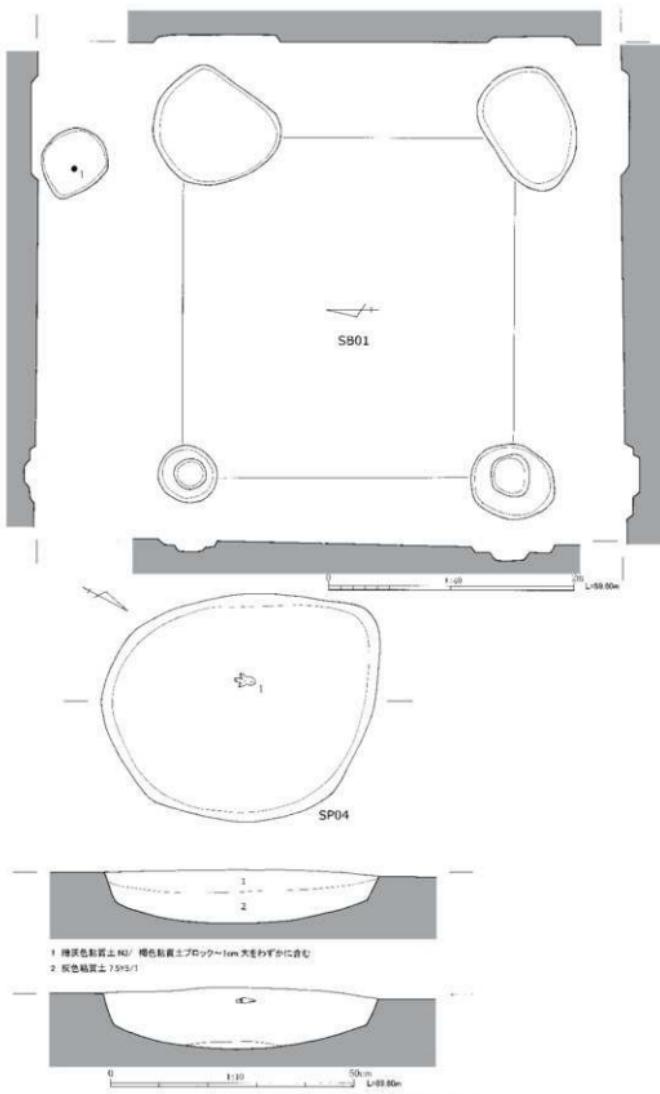
第16図 周溝付建物B群



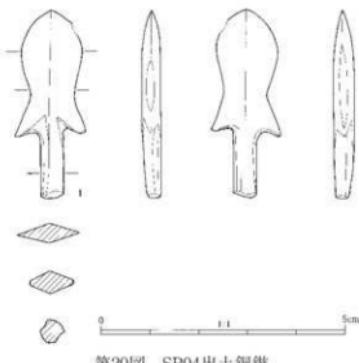
第17図 周溝付建物 SH07・09詳細図



第18図 周溝付建物 SH08・10詳細図



第19図 SB01掘立柱建物・SP04小穴



第20図 SP04出土銅鐘

m²である。

SP04（第19・20図） SB01との関係は不明瞭であるが、北へ40cm離れた小穴SP04からは、銅鐘1点（1）が出土しており、あわせて記載しておく。SP04は、長軸1.14m、短軸0.94mの小穴で、小穴の中央、1層下部から銅鐘（1）が横位で出土した。土層は、通常の自然堆積によるものとみられ、特徴的な点はみられない。

銅鐘（1）は、ほぼ完形の柳葉形銅鐘である。かえりが幅広で、長さ3.85cm、幅1.4cm、茎の厚さ0.45cm×5.0cm、重さ6.5gを測る。先端部のみ刃が研ぎ出され、下方は端部が丸い。鎬はあまりはっきりせず、研磨痕ははっきりしない。茎の断面形が示すとおり、型ずれしている。茎の端部はやや丸みをもつが、切斷されているようである。少し濃い緑色を呈し、特に銅質が優れているわけではない。

SB02（第21図） 基本構造は桁行4間、梁行1間と考えられる掘立柱建物である。桁行3.84m、梁行2.0mを測る。南東部の隅の柱穴は、近世の耕作溝により削平され、検出できなかった。柱穴は、一部重複している部分がある。平面積は、7.68m²である。

（6）小穴・包含層出土遺物（第22図）

小穴と包含層から出土した遺物を以下に示す。3は、SP05から出土した縄文時代晩期後半の壺の口縁部片である。内外面は横ナデ調整で、口縁外面の端部がわずかにくくらむ。外面には煤が付着している。4は、調査区西端部の遺構検出面で出土した古式土師器有段口縁壺の口縁部片である。口縁端部は面取りされる。庄内式新段階から布留式古段階頃と推定される。5は、やや厚めの古式土師器壺底部片であろう。6は、調査区東端の遺構検出面で出土した8世紀の須恵器壺である。外面には灰オリーブ色の自然釉が付着する。内面は焼き膨れしたところがあり、焼成は不良である。

（7）自然流路

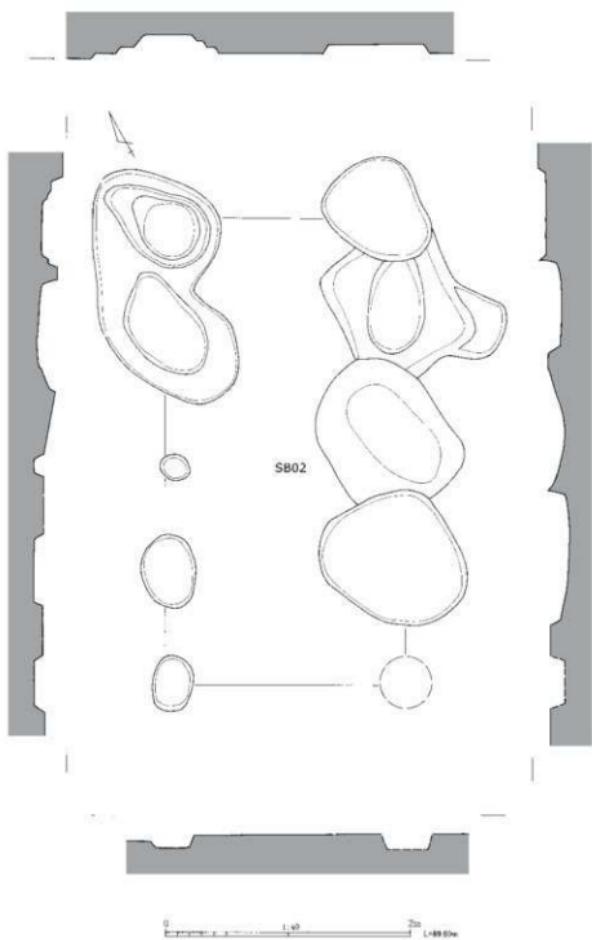
SR01（第23・24・25図） 調査区西側で東西に流れる自然流路である。北側の上端が確

的にさらに細く溝状に掘りこまれている。SD06は、幅92.0cmと広く、深さ8.0cmを測る。SD04と同様に、内側が部分的にさらに細く溝状に掘りこまれている。いずれの周溝も、残存状況は良好ではなく、削平によって一部消失しているのであろう。周溝の埋土は、暗灰色粘質土である。

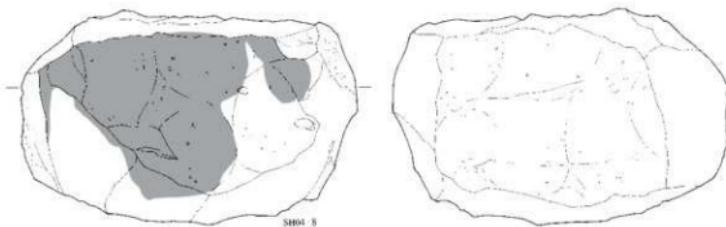
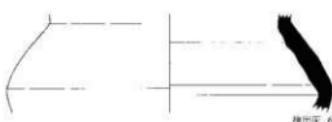
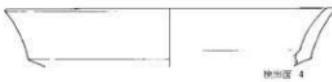
柱穴と周溝からは遺物は出土していない。

（5）掘立柱建物

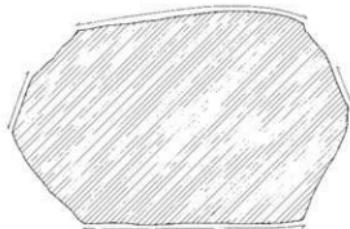
SB01（第19図） 1間×1間の掘立柱建物である。建物の規模は、長軸2.8m、短軸2.7mでほぼ正方形である。平面積は、7.56



第21図 SB02掘立柱建物

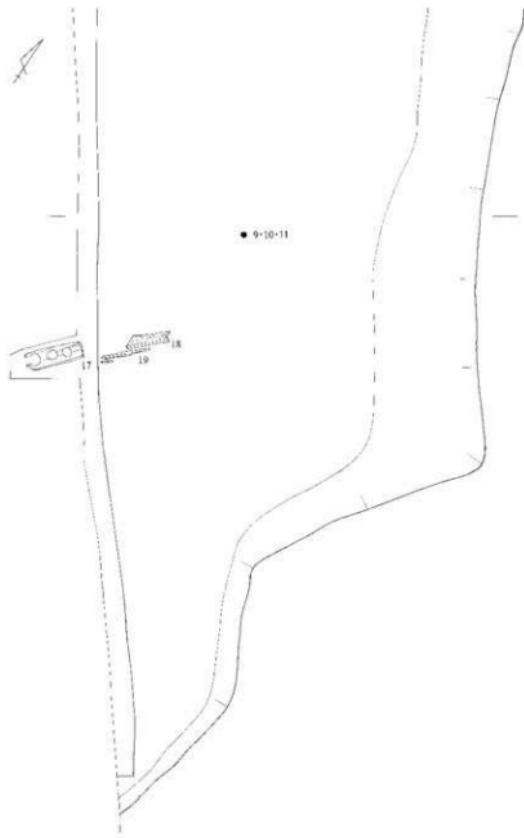


5mm



0 1.0 1.5 2.0 mm

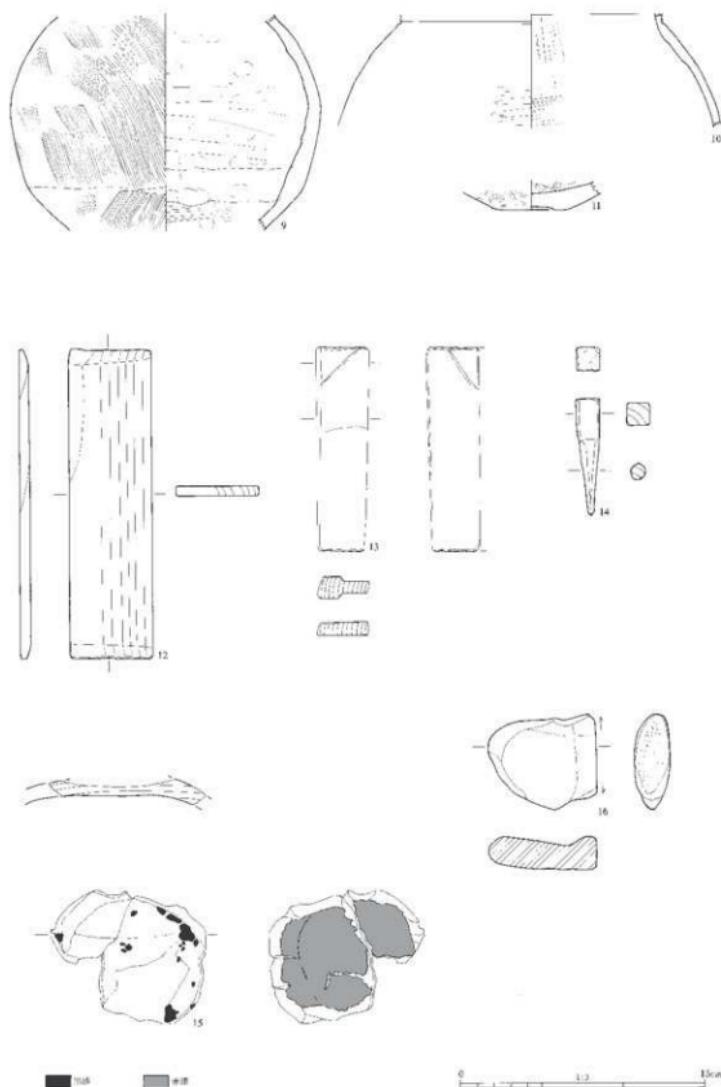
第22図 遺構・包含層出土遺物



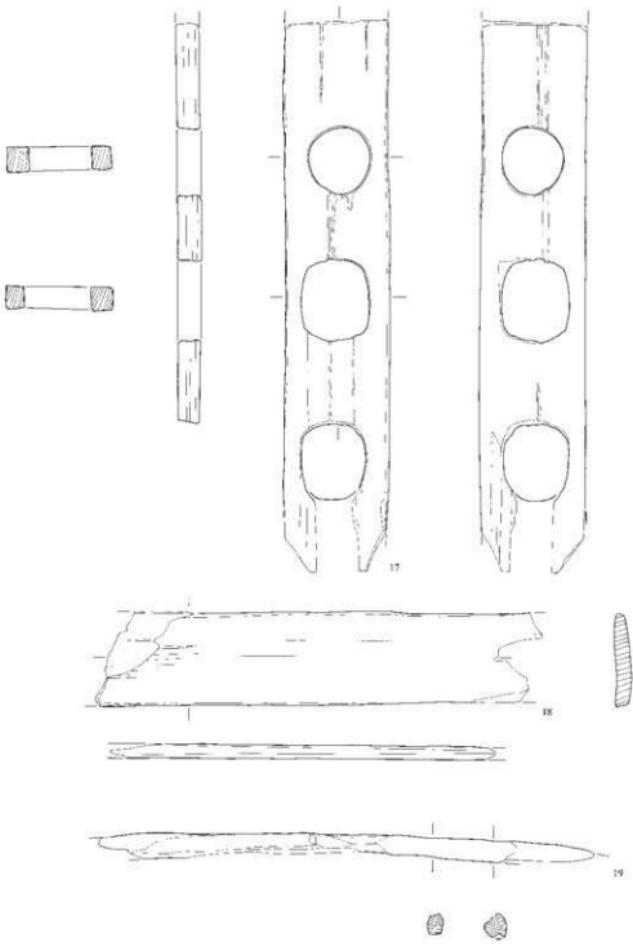
1 灰色砂和底土 N2: 氯化物～9mm 大きわざかに含む
2 灰色砂質土 7SY5/1 (基盤層)

0 1m 4m

第23図 SR01自然流路



第24図 SR01自然流路出土遺物（1）



第25図 SR01自然流路出土遺物（2）

認され、南側は調査区外に位置し、南側へ蛇行するようである。幅8.0m以上で、最も深い部分で32cm程度の深さである。堆積層は1層のみで、1層下部からは古式土師器(9・10・11)と木器(12・13・14・15・17・18・19)、石器(16)が出土した。17・18・19は近接して出土し、その他の木器もこれらの周辺で出土した。古式土師器(9・10・11)は、木器(17・18・19)と約2m離れた位置で出土した。出土した木器の時期については、周辺では古代や中世の土器はわずかしか出土しておらず、むしろ古式土師器が近くで出土しているため、多くのものは庄内式期から布留式期古段階の時期幅におさまる可能性が高い。

9は、甕の肩部である。外面の上部の肩部に近い部分はハケ調整の後に横ナデ調整がなされ、その下は斜めのハケ調整である。外面の下半部を中心に全体的に煤がよく付着している。内面には粘土紐の継ぎ目痕がよく残り、下方の底部近くは横ハケ調整で、その上部はナデ調整である。器壁が0.6~1.2cmと全体的に厚く、粘土紐の継ぎ目痕の凹凸がよく残り、粗雑なつくりといえる。10は、甕の肩部の可能性がある。外面の調整は磨滅により不明瞭であるが、調整は横ミガキのようである。内面は横ハケ調整である。11は、上げ底となる底部片である。甕の可能性がある。

12は、板状の不明木製品である。完形で、長さ19.0cm、幅5.1cm、厚さ0.65cmを測る。両端部は面取りされ、一方は平らに、もう一方は三角形に面取りされ、先端がややとがる。両端部が磨滅していることから、土器の調整具の可能性がある。13は、板状の不明木製品である。長さ12.5cm、幅3.2cm、厚さ1.3cmを測る。両端部は再加工され、一方の端部の両面は斜め方向に薄く削り取られている。14は、完形の棒状を呈する不明木製品である。栓の可能性がある。長さ7.2cm、根元の厚さは1.4cm、先端部幅0.4cmである。根元は断面正方形で、その先是断面多角形となり、先が細くなる。15は、蓋と推定される漆塗製品である。外縁部は欠損し、外面も著しく剥離しており、残存状態は良好ではない。推定で、口径13.5cm前後、底径7.0cm前後、内底8.2cm前後である。外面には黒漆が、内面には赤漆が塗られている。漆を用いた精製品であり、注目できる。17は、建築部材片の可能性がある。板状で、両端部が欠損し、3カ所に孔が穿たれる。孔の大きさは、孔の欠損部側から10.6cm×推定12.6cm、11.2cm×13.6cm、9.9cm×10.5cmである。孔の内壁の断面形は、一方の面向に向かってわずかに反っている。長さ90.4cm、幅17.8cm、厚さ4.1cmを測る。18は、建築部材片の可能性が高い板状の木製品である。長さ71.3cm、幅15.3cm、厚さ2.6cmを測る。両端部を欠損する。19は、建築部材片の可能性が高い棒状の木製品である。両端部を欠損する。長さ81.5cm、厚さ3.6cm~4.2cmを測る。

16は、砥石と推定される。楕円形で、一方の端部は摺切状に切断された後、切断面が研磨されて平坦な面をなしている。断面形は湾曲した板状となる。長さ6.5cm、幅5.5cm、厚さ2.05cmである。青灰色を呈するが、石材は不明である。

参考文献

- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2010「十里遺跡」主要地方道草津守山線（十里）
緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書 2
- 中村 健二 2008「凸帯文系土器（中四国・近畿・東海地方）」「総覧 繩文土器」アム・プロモーション

第3章 総括

1 稲部西遺跡における弥生時代後半から古墳時代前期の集落

(1) はじめに

稲部西遺跡で検出された遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期と推定される時期のものが大半で、当該期の遺構として、竪穴建物6棟、土坑5基以上、周溝付建物5棟、掘立柱建物2棟、自然流路1条が検出された。ここでは、竪穴建物と周溝付建物を中心に第1次調査で明らかになった集落の状況について整理しておきたい。⁽¹⁾

(2) 竪穴建物について

竪穴建物は6棟検出され、部分的に削平を受けているものもある。この内、SH04（長軸3.0m・短軸2.6m）は方形プランの竪穴建物、SH02（長軸5.7m・短軸4.7m）・SH03（長軸6.0m・短軸3.9m）は六角形プランの多角形竪穴建物、SH01（径10m以上）も多角形竪穴建物である可能性が高く、SH05（径5m前後）は一部の検出にとどまって全体を推定するのが困難であるが、多角形竪穴建物の可能性がある。SH06は、方形あるいは多角形の竪穴建物である。

まず注目されるのは、平面プランが多角形の竪穴建物2棟以上が検出されたことである。多角形竪穴建物の可能性のあるものも含めると、計4棟である。この内、SH01は、径10m以上と推定され、規模の大きな部類にはいる。また、SH02は、建物内に炭化物を含む小穴が多数あり、通常の煮焼きに用いる炉穴にしては数が多く、機能は限定できないが、何らかの生産活動に伴う工房的な建物である可能性が考えられるものである。同様に、方形プランの竪穴建物SH04（長軸3.0m、短軸2.6m）も、工房的な建物と考えられるものである。居住用にしては小規模で、屋内の空間が狭く、建物内中央床面では硬化面と炭の集中が認められた。鉄滓などは出土していないが、鉄床石と推定される台石が据えられており、鍛冶工房の可能性が高いものと考えられる。

こうした多角形竪穴建物は、近江では弥生時代後期中葉から多くみられるようになるが、集落遺跡のなかでも多角形プランの建物は限定的で、希少である。湖南地域の事例であるが、古い例では、弥生時代後期初頭の中畠・古里遺跡、弥生時代後期前半の金森東遺跡例が知られる。弥生時代後期中葉から布留式期までにみられ、特に弥生時代後期中葉の例が最も多く、次いで多いのが弥生時代後期後半である。庄内式期から布留式期の例はごくわずかで、柳遺跡で検出されている。現状では、野洲川流域の伊勢遺跡で9棟以上と偏在する傾向が指摘できる。一方、湖東地域では、愛知川左岸域の千里遺跡と藏之町遺跡、日野川右岸域の堀ノ内遺跡で弥生時代後期中葉から後半にかけての五角形竪穴建物が検出されている。市域で

は、妙楽寺遺跡で五角形竪穴建物の可能性のあるものが知られているにすぎなかつたが、文禄川流域の稻部西遺跡で確実な例が検出されたことになり、湖東地域の湖岸の広い範囲で多角形竪穴建物が分布している様子が明らかになってきた。多角形竪穴建物の中には、工房的な建物が含まれることも注目できよう。

これらの多角形竪穴建物や方形竪穴建物の時期であるが、いずれの建物からも時期を明確に示す土器が出土しておらず、判断が難しい状況である。SH02の上面からは、庄内式期新段階の土器が出土したが、必ずしも遺構に伴うものとは断言できない。ただし、後に記述する周溝付建物が竪穴建物を切り込んでいることは、竪穴建物の時期を推定するうえでは、一つの根拠になりうると考えられる。

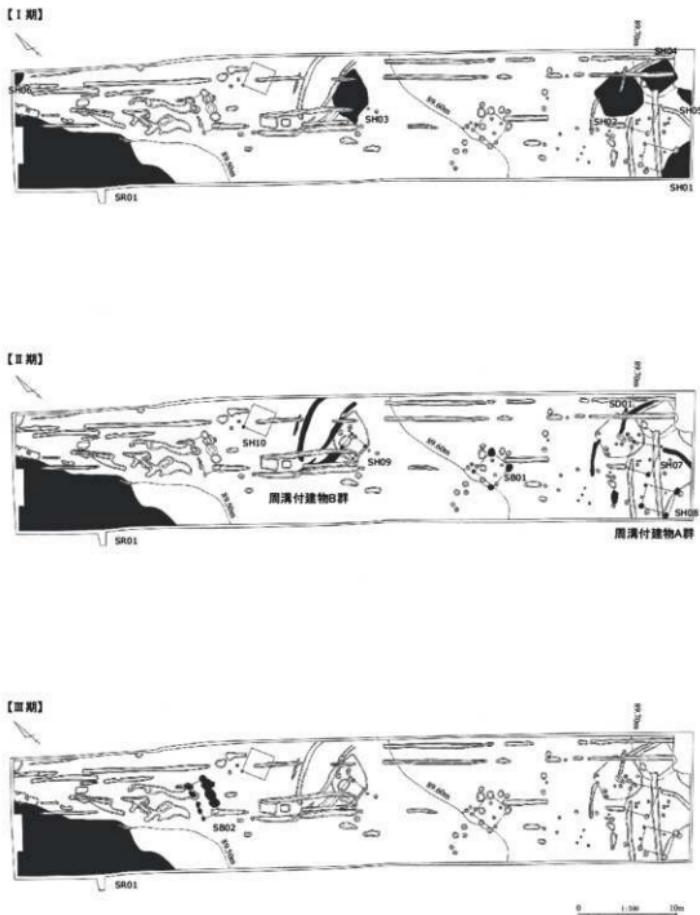
(3) 周溝付建物について

周溝付建物は、竪穴建物や平地式建物、掘立柱建物の周囲を溝で区画した建物で、SH07・SD03・SD10、SH08・SD02・SD09、SD01、SH09・SD05・SD07、SH10・SD04・SD06の5棟を検出した。このうちの1棟については、周溝 SD01のみが検出され、削平などにより建物部分は検出されなかつたが、柱穴が存在していたものと想定したものである。周溝付建物は、大きく2カ所に配置が分かれており、調査区東端部のA群、調査区中央部のB群に分かれている。

A群はSH07、SH08、SD01の3棟で、それぞれ切りあつてあるが、前後関係は不明である。ただし、SH07とSH08では、建物の規模、周溝で区画された範囲ともに近い大きさで、建物の方位も近く、相互にきわめて近い時期の遺構であると推測できる。建物の構造は1間×1間で、周溝で区画された範囲は、周溝の内側の底の立ち上がり部分で計測して径10~11mである。周溝は部分的に途切れしており、円形あるいは隅丸方形の形でめぐるるものと推定される。

B群は、SH09とSH10で、ともに切り合うが、両者の前後関係は不明である。A群と同様に、周溝と建物の方位からみて、ともに近い時期の遺構であると推定される。やはり円形あるいは隅丸方形の形に周溝がめぐるようである。建物の構造は、1間×1間と推定される。SH09の周溝で区画された範囲は、径11mである。一方、SH10は、径30mと規模が突出して大きい。

これらの周溝付建物の柱穴や周溝からは土器が出土しておらず、時期を示しうる遺物としては、SH02の上面から出土した庄内式期新段階の古式土師器が唯一である。こうした周溝付建物は、近江では弥生時代中期の門ヶ町遺跡例を初現とし、庄内式期から布留式期にかけて、湖岸の低湿地を中心に増加する。現在のところ、湖南地域の柳遺跡、中兵庫遺跡、伊勢遺跡、下長遺跡、十里遺跡など野洲川流域に集中している。周溝付建物については、北陸地方から導入された住居形式である可能性が高く、基本的に低湿地に適応した建物であろう。また、建物に伴つて区画する周溝が集落内における集団の地位や階層を示していたとする考え方もあり（北原2007・2010）、十里遺跡や下長遺跡では周溝付建物がより上位者の建物と理



第26図 弥生時代後期後半から古墳時代前期における集落の変遷

解されている。大阪府尺度遺跡では、首長居館と目される建物とそれを囲む区画溝の周りに周溝付建物が展開している。出自や職能などの階層的な関係から、周溝付建物について検討する必要がある。一方、湖東地域では、蛭子田遺跡で布留式期の周溝付建物が検出されており、稲部西遺跡の例は、これに次ぐものとなる。湖東地域のなかで、周溝付建物が検出された集落の構造や性格について考える素地がつくられつつある。

(4) 遺構の時期と集落の変遷

多角形建物を含む堅穴建物とこれをきる周溝付建物からなる集落であることが判明したが、これらの建物の時期的な関係と集落の変遷及び問題点について述べておきたい。

まず明らかな点は、多角形堅穴建物を含む堅穴建物群が営まれ、その次の段階として、堅穴建物群をきって周溝付建物群が構築されていることである。近江で検出された周溝付建物をみると、多くみられるのは、庄内式期から布留式期にかけてで、特に庄内式期にピークが認められる。また、SH02の上面から出土した庄内式期新段階の土器が、周溝付建物 SH07や SD01に本来伴っていた可能性もあることから、現状では、周溝付建物の時期は、他の遺跡の検出例やわずかな出土土器から、庄内式期である可能性が高いものと推定しておく。このように考えると、周溝付建物にきられている堅穴建物は、時期の下限を庄内式期の中のある時期に求めることができそうである。周溝付建物が庄内式期新段階には出現している公算が高いことから、庄内式期の新段階の可能性は低いであろう。ここでは、庄内式期初頭頃を下限として理解しておきたい。次に上限であるが、多角形堅穴建物の他の事例からも、盛行時期は弥生時代後期中葉から後半であり、庄内式期にくだる例はわずかである。出土土器から明確に時期を絞り込むことは難しいが、稲部西遺跡の多角形堅穴建物についても、上限を弥生時代後期後半頃と考えておく。

これらの堅穴建物と周溝付建物の時期については、稲部西遺跡第1次・第2次調査で検出された自然流路で出土した土器や隣接する稲部遺跡の土坑群から出土した土器からの検討も今後必要である。

予察としてまとめると、現状で以下のような遺構の変遷を推定できる。

I期 多角形堅穴建物を含む堅穴建物群、SH01・SH02・SH03・SH04・SH05・SH06が営まれ、なかには SH02・SH04のように、工房的な建物も含まれる。弥生時代後期後半から庄内式期初頭頃の時期と推定される。

II期 周溝付建物群、SH07・SD03・SD10、SH08・SD02・SD09、SD01、SH09・SD05・SD07、SH10・SD04・SD06の5棟が構築される。建物の方位が共通することから、掘立柱建物 SB01もこの段階に加えておく。庄内式期から布留式期初頭と推定される。

III期 主軸方位が真北に近い掘立柱建物 SB02が、この時期にあたる可能性がある。時期ははっきりしないが、布留式期古段階頃と推定される。

(5) 今後の課題

遺跡単位の詳細な視点では、多角形堅穴建物や周溝付建物が、比較的集中しており、集落

のエリアごとにこうした特徴的な建物群が設定されている可能性があり、建物の時期的な検討もふまえながら、今後の周辺の調査のなかで集落内の機能分化・階層分化の様子を検討する必要があろう。また、東に隣接する稲部遺跡第2次調査区の落ち込み部分とその南側で検出された土坑群からは、廃棄された古式土師器が豊富に出土しており、土器編年上の基準資料になりうる土器群も含まれる。これらの土器の編年検討により、稲部西遺跡の造構の時期と集落の変遷もより明らかになると期待される。なお、稲部遺跡第2次調査区では、独立棟柱建物、総柱建物、工房、井戸、土器を廃棄した土坑が集中するエリアが検出されており、主に庄内式期から布留式期にかけて機能していた祭祀空間と評価できる。こうした稲部遺跡の祭祀空間と稲部西遺跡の堅穴建物と周溝付建物からなる居住域との時期的な関係や両遺跡をあわせた集落の構造も今後の検討課題となろう。地域史を語る資料として、検出した堅穴建物と周溝付建物の特徴を明らかにするとともに、両遺跡の集落の変遷と文禄川流域において稲部遺跡・稲部西遺跡が出現した意義を検討する作業については、今後の調査と報告における課題としたい。

旧愛知川の支流である文禄川・来迎川流域として考えると、庄内式期では、湖岸近くに普光寺廃寺遺跡の集落があり、布留式期としては、芝原遺跡の集落が知られているが、これらの集落との関係及び愛知川の対岸に位置する斗西・中沢遺跡群との関係が今後問題となろう。

参考文献

- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2010『十里遺跡』主要地方道草津守山線（十里）緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書2
北原 治 2010「調査のまとめ」『十里遺跡』主要地方道草津守山線（十里）緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書2
北原 治 2007「滋賀県内の周溝付建物について」『淡海文化財論叢』第2集 淡海文化財論叢刊行会
彦根市教育委員会 1982『稲部遺跡発掘調査概要報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第3集
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1995『普光寺廃寺・屋中寺廃寺』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1997『芝原遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1998『普光寺廃寺遺跡発掘調査報告書』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1998『屋中寺廃寺遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2010『十里遺跡』主要地方道草津守山線（十里）緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書2
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2010『肥田城遺跡・肥田西遺跡・鶴田遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2014『蛭子田遺跡1』
伴野幸一 2003「伊勢遺跡の構成と五角形住居」「伊勢遺跡75次発掘調査報告書」守山市文化財調査報告書
細川修平 2006「近江における弥生時代の集落研究の現状と課題」「人間文化」19号 公立大学法人滋賀

県立大学人間文化学部

細川修平 2013 「山の集落・湖の集落—古墳時代開始期の集落関係—」『紀要』第26号 （公財）滋賀県文化財保護協会

註

- (1) 平成26年6月9日～6月13日にかけて奈良文化財研究所において行われた文化財担当者専門研修「建築遺構調査過程」では、林良彦氏、箱崎和久氏、鈴木智大氏から稻部遺跡第2次調査・稻部西遺跡第1次調査で検出された掘立柱建物について有益なご教示を賜った。また、森岡秀人氏、細川修平氏、北原治氏からは掘立柱建物群や当該期の集落像について貴重なご意見・ご教示を賜った。

第1表 出土遺物観察表

番号	遺像・層位	種別	細別	残存率 (%)	反転 固化	器形		色調	備考
						幅 (cm)	高 さ (cm)		
1	SH04	青銅製品	圓盤	100		1.4	3.85	0.5	
2	SH01	織文土器	深鉢	5	○	32.8		外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
3	SH05	織文土器	盆	5	○			15.5	
4	桃山面	古式土陶器	甕	5	○			20	外面：浅黃褐色 内面：浅黃褐色
5	桃山面	古式土陶器	甕	5	○				外面：淡黄色 内面：淡黄色
6	桃山面	瓦器	甕	5	○	20			
7	SH02上面	古式土陶器	甕	5	○			14.8	
8	SH04	石製品	石臼	100		20.5	13.2	13.1	暗灰灰色
9	SH01	古式土陶器	甕	15	○	19			外面部：灰褐色 内面：灰黄色
10	SH01	古式土陶器	甕	5	○				外面部：淡黄色 内面：灰白色
11	SH01	古式土陶器	甕	5	○				外面部：棕色 内面：灰黄色
12	SH01	木製品		100		5.1	19	0.65	
13	SH01	木製品				3.2	12.5	1.3	
14	SH01	木製品	栓	100		1.4	7.2	1.4	
15	SH01	木製品	蓋	60					
16	SH01	石製品	砾石	100		5.5	6.5	2.05	青灰色
17	SH01	木製品				17.8	90.4	4.1	
18	SH01	木製品				15.3	71.3	2.6	
19	SH01	木製品				4.2	81.5	4.2	

色調は『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議局監修)に準拠

図 版

図版 1



1 調査前風景（西から）



2 調査前風景（東から）

図版2



1 調査区遠景（東から）



2 調査区遠景（北から）

図版 3



1 調査区全景（西から）



2 調査区東壁土層断面（北から）

図版 4



1 SH02多角形堅穴建物（南西から）



2 SH02 (SP01) 土層断面（西から）



3 SH02炭化物検出状態（南から）

図版 5



1 SH02 (SP01) 検出状態 (南から)



2 SH02 (SP01) (南から)

図版 6



1 SH04堅穴建物（南から）



2 SH03多角形堅穴建物・SH09周溝付建物（東から）

図版 7



1 SH08周溝付建物（北から）



2 SH07周溝付建物（北から）



1 SB01掘立柱建物（東から）



2 SB02掘立柱建物（北から）

図版 9



1 SP04小穴 銅鑼出土状態（南から）



2 SP04小穴（東から）

図版10



1 SR01自然流路土層断面（東から）



2 SR01自然流路 木器出土状態（北から）

図版11



1 調査風景（東から）



2 調査風景（東から）



1 SP04出土銅鏡 A面（実寸大）

2 SP04出土銅鏡 B面（実寸大）



3 SP04出土銅鏡側面（1）

4 SP04出土銅鏡側面（2）

図版13



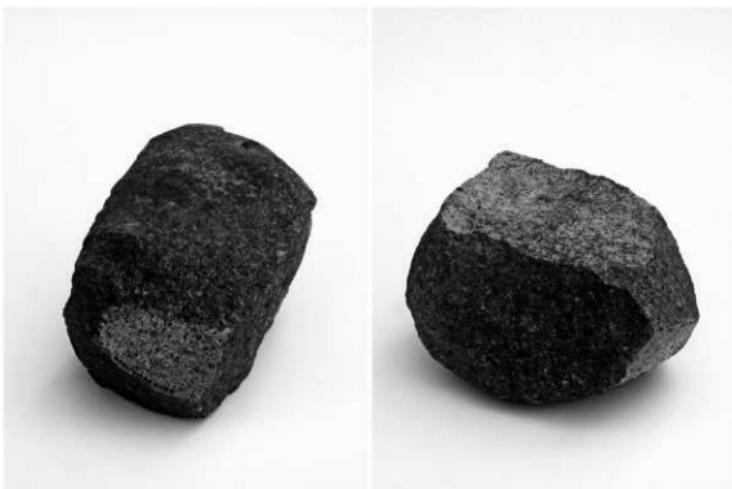
1 遺構・包含層出土土器



2 SR01自然流路出土土器・石器



1 SH04堅穴建物出土台石



2 SH04堅穴建物出土台石側面

3 SH04堅穴建物出土台石裏面

図版15



1 SR01自然流路出土木器 A面



2 SR01自然流路出土木器 B面



1 SR01自然流路出土木器



2 SR01自然流路出土木器

図版17



1 SR01自然流路出土木器



2 SR 01自然流路出土木器



3 SR 01自然流路出土栓



4 SR01自然流路出土蓋

報 告 書 抄 錄

彦根市埋蔵文化財調査報告書第62集

稻部西遺跡第1次発掘調査報告書

—市道福部本庄線道路改良工事に伴う発掘調査—

平成27年（2015年）3月27日発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課

滋賀県彦根市尾末町1番38号

TEL0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地